

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿
農業資材販売等関係者

福岡県病虫害防除所長

平成20年度病虫害発生予報第7号(11月)について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病	並	並	やや多
	炭疽病	やや少	やや少	並
	アブラムシ類	並	並	並
	ハダニ類	並	並	やや多
ナス	すすかび病	並	並	並
キャベツ	コナガ	やや多	やや多	やや多
	モンシロチョウ	やや多	やや多	やや多
野菜共通	コナジラミ類	やや多	やや多	やや多
	オオタバコガ	やや多	やや多	やや多

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目、2週目は平年並、3～4週目は高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成20年10月24日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生
の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.7%（平年 1.0%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている（±）。

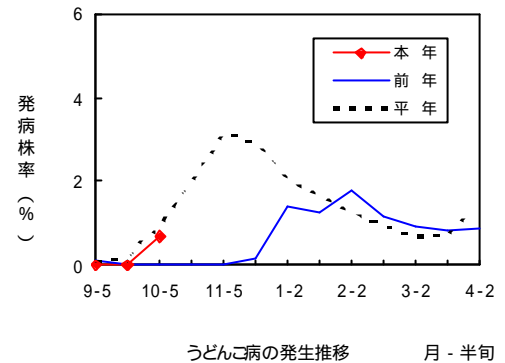
(3) 防除上の注意

ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面の病斑の有無を随時確認し早期発見に努める。

イ ビニル被覆後から年内にかけて発病に好適となるので、予防散布を徹底する。

ウ 下葉かぎを行い、薬液が葉裏にもかかるようにする。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をロテーション散布する。



2 イチゴ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

発病株率 0.1%（平年 0.5%、前年0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後のハウス内温度の上昇で潜在感染株が発病しやすくなる。また、着果負担などの株へのストレスは発病を助長する。発病株は、クラウンごと抜き取り処分する。

イ ほ場の排水やハウスの換気をはかり、多湿にならないようにする。

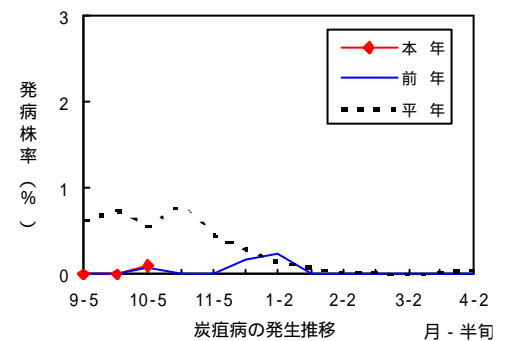
(4) 次作の健全親株確保に向けた対策

ア 炭疽病が発病した苗と一緒に育苗した苗は親株にしない。

イ 親株が足りない場合は、ビニル被覆後に定植株から発生した秋ランナーを採苗し、親株として育成する。

ウ 定植株の生産力を低下させないように、採苗は1株から1苗とする。

エ 親株管理は、できるだけ雨よけ施設内で行う。



3 イチゴのアブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

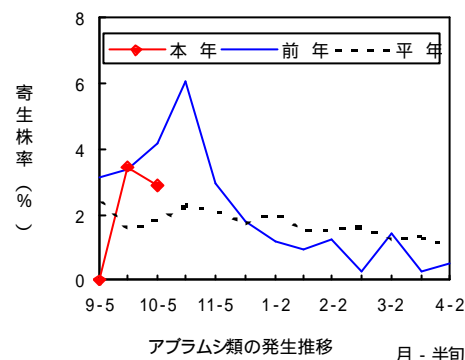
寄生株率 2.9%(平年 1.9%、前年 4.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 多発後は防除が困難となるので、発生状況に十分注意し初期防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 4.0%(平年 3.9%、前年 1.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)。

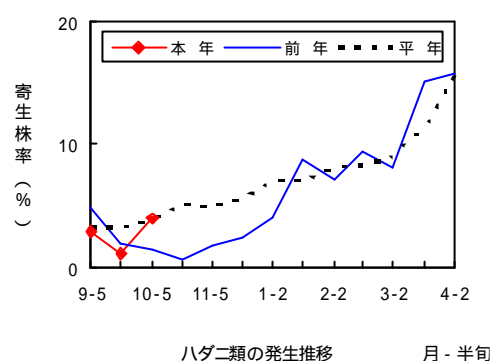
(3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後は乾燥しやすくなり、本種の増殖に好適となるので注意する。本種は、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。その際、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ ハダニ類が寄生した摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

エ カブリダニ類等の天敵を利用する場合は、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布し、ハダニ類の密度を下げてから行う。



5 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 1.0%(平年 0.9%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)。

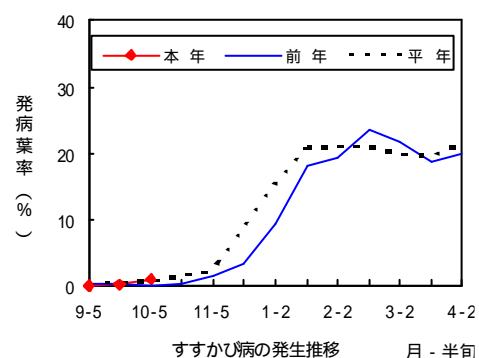
(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 原油価格の高騰により、暖房機の設定温度を低めに設定したり、二重被覆等を設置した場合、発生が多くなる恐れがあるので注意する

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 キャベツのコナガ、モンシロチョウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

コナガ寄生株率 3.3% (平年 2.4%、前年 0.2%)

モンシロチョウ

寄生株率 5.1% (平年 1.4%、前年 2.7%)

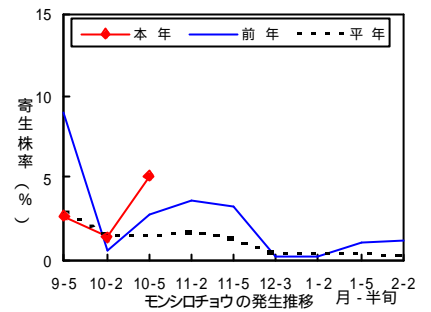
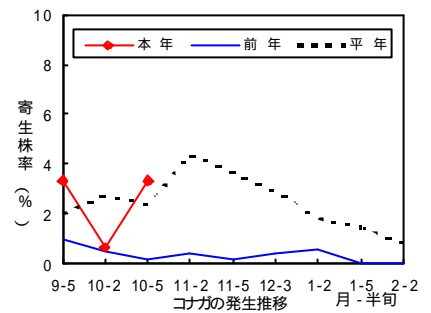
イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)

(3) 防除上の注意

ア 多発すると防除が困難となるので、結球期前の防除を徹底し、密度を抑制する。

イ 老齢幼虫は薬剤に対する感受性が低いので、1～2齢幼虫期に防除を実施する。

ウ 圃場への侵入源となるアブラナ科雑草は除草する。



7 コナジラミ類 (野菜共通)

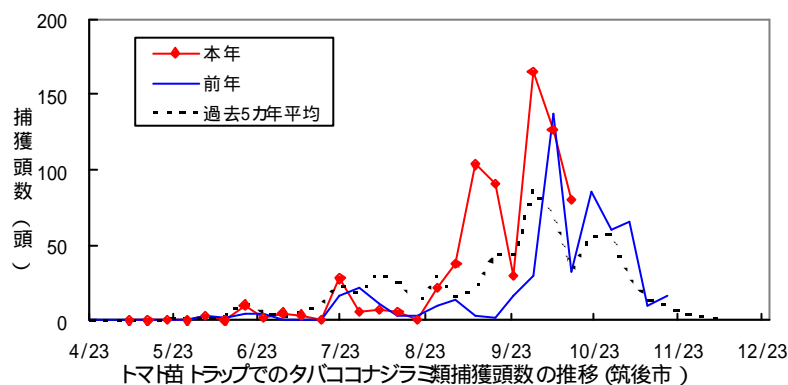
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア トマト苗トラップにおける10月1半旬～4半旬の捕獲頭数は、平年よりやや多かった(+)

筑後市 372頭 (過去5カ年平均 191頭、前年 198頭)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)

(3) 防除上の注意

ア ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉は、できる限り除去する。

ウ 葉裏や下位葉にも、薬液が十分かかるよう散布する。

エ 本種は、トマト黄化葉巻病(TYLCV)、キュウリ退緑黄化病(仮称)(CCYV)の媒介虫である。発病株は、早期に抜き取りほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。

8 オオタバコガ（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かつた(+)。

イチゴ寄生株率 1.7% (平年 0.7%、前年 0.3%)

レタス寄生株率 3.6% (平年 1.6%、前年 2.8%)

イ フェロモントラップにおける9月1半旬～10月4半旬の誘殺虫数は、平年より多かつた(+)。

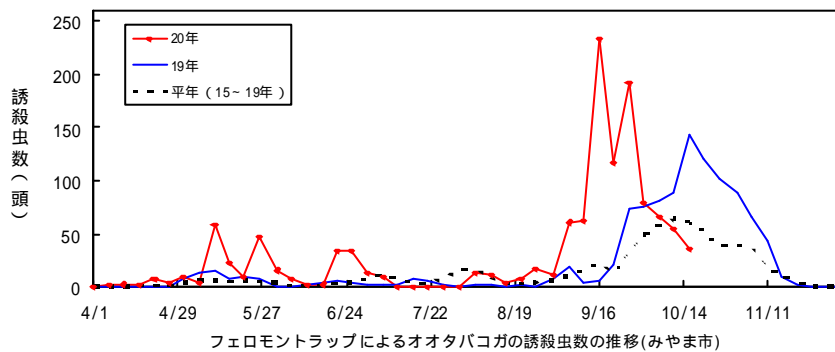
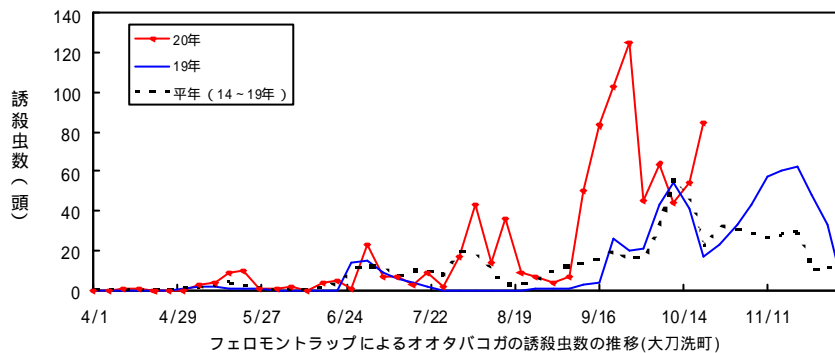
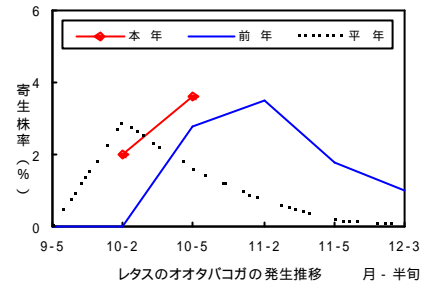
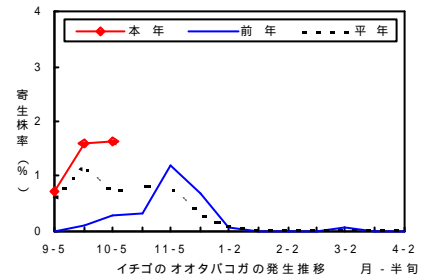
三井郡大刀洗町 579頭

(過去6カ年平均 239頭、前年 215頭)

みやま市 913頭

(過去5カ年平均 335頭、前年 519頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、孵化直後の幼虫をねらって行う。中齢以降の幼虫は未熟果や結球部位に食入するため、防除効果が著しく低下する。

イ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

ウ キャベツ、レタスでは、結球期前の防除に努める。また、レタスでは、トンネル被覆前の防除を徹底する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナス うどんこ病 灰色かび病	並 並	並 並	やや多 並	・ 整枝、剪定を行い、通風をよくする。 ・ 発病した葉や果実は、早めに持ち出し処分する。
トマト 葉かび病	並	並	並	・ 整枝、剪定を行い、通風をよくする。 ・ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。
キャベツ 黒腐病 菌核病	並 並	並 並	並 並	・ 防除適期は結球開始期である。株元へ十分かかるように、株の周囲から散布する。
レタス 灰色かび病 菌核病 腐敗病	並 並 並	並 並 並	並 並 並	・ 冬に凍害にあうと被害が激しくなるので、トンネルのビニル被覆が遅れないようにする（11月下旬～）。
野菜共通 ハスモンヨトウ	並	並	並	・ 若齢幼虫は群生しており、かすり状の葉をみつけたら直ちに除去する。
ミナミキイロ アザミウマ	並	並	並	・ 本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。本ウイルスはアザミウマ類の発生が低密度でも伝染し、蔓延する恐れがあるため、発病株は早期に除去しアザミウマ類の防除を徹底する。

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数のなどラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpjn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp